

日本における促進指向的及び抑制指向的ジェンダー規範

著者	倉矢 匠
著者別名	KURAYA Takumi
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	53
ページ	107-124
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008835/

日本における促進指向的及び抑制指向的ジェンダー規範¹

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程 2 年

倉矢 匠

要旨

ジェンダー・ステレオタイプには強い規範的側面がある。本研究の目的は男女それぞれに対して促進指向的規範と抑制指向的規範を独立に想定し、日本におけるジェンダー・ステレオタイプの規範的側面を4つに類型化した上で、それらがどのような特性により反映されているのかを検証することであった。関東在住の25歳～64歳の社会人382名を対象にオンライン調査を実施した結果、日本における促進指向的男性ジェンダー規範に該当した特性は作動性を反映していた。また、抑制指向的男性ジェンダー規範には、脆弱性（作動性欠如）と過干渉（共同性過多）を反映する2タイプの特性が該当した。一方で、抑制指向的女性ジェンダー規範は支配性を、促進指向的女性ジェンダー規範は従順さと美を反映していることが示された。最後に、本研究で得られた結果とアメリカでの研究知見との相違点について考察がなされ、ジェンダー・ヒエラルキーや結婚制度など、日本でジェンダー規範と関連する可能性がある要因を踏まえた検討を今後実施する意義について議論がなされた。

キーワード：ジェンダー、ステレオタイプ、促進指向的/抑制指向的規範、
男性性、女性性

問題

ある社会集団の成員が持つ特性や行動の傾向について、過度に一般化されている知識のことをステレオタイプと呼ぶ。Devine (1989) は、ある文化において社会に一般的に普及しているステレオタイプに関する知識のことを、文化的ステレオタイプと呼び、我々人間

1. 本研究は平成 27 年度井上円了記念研究助成「個人研究」による助成を受けて行われた。

は、その妥当性を批判的に検討できない幼少期の段階で、周囲の環境から文化的ステレオタイプを獲得していくことを指摘している。ジェンダー・ステレオタイプは女性・男性という社会的カテゴリーの成員に関する知識構造であるが、Fiske & Stevens (1993) は、人が発達段階の初期から男女がとるべき行動を観察する機会を数多く得ており、そして集団成員と直接接触する回数も多いことから、このジェンダー・ステレオタイプが文化的ステレオタイプの代表的な1つであることを指摘している。加えて、これらのことからジェンダー・ステレオタイプは他のステレオタイプと比べ規範的な要素を確立しやすく、同時に規範から逸脱した行動の検出もジェンダー・ステレオタイプでは容易であるとされている。この考えを支持する形で、ジェンダー・ステレオタイプに反した振る舞いをする者を検出し、その人物に対してネガティブな反応を示す現象 (i.e., バックラッシュ) が数多く報告されている (e.g., Conley, Ziegler, & Moors, 2012; Heilman & Wallen, 2010; Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010; Williams & Tiedens, 2015)。また、それだけではなく、周囲からジェンダー・ステレオタイプを逸脱しているとみなされることを、人々が懸念していることや (e.g., Cherry & Deaux, 1978; Phelan & Rudman, 2010; Yoder & Schleicher, 1996)、それによってジェンダー・ステレオタイプが社会の中でさらに強化されていく過程も示されている (Rudman & Fairchild, 2004)。

このように、ジェンダー・ステレオタイプは、単に記述的なだけでなく、規範的なステレオタイプであることが大きな特徴である (e.g., Burgess & Borgida, 1999; Glick & Fiske, 2001; Rudman & Glick, 1999)。記述的ステレオタイプは、対象となる集団の成員を特徴づける属性や役割、行動に関する信念であり、日常生活の中で、「○○はこうである」というような、単純な“情報”を構造化することがその機能といえる。例えば「高齢者は頑固だ」、「タトゥーのある人は攻撃的だ」といったステレオタイプはこれにあたる。一方で、規範的ステレオタイプとは、「○○はこうあるべきである」という、対象集団の成員に相応しいとされる属性や行動、役割に関する信念である。それは“価値観”として我々に働きかける力を持ち、我々の行動や在り方に対する“期待”を生む。例えば、「女性は料理がうまくなくてはならない」などがこれにあたる。規範的ステレオタイプの機能は、社会における勢力の不平等を正当化することにあると考えられている (Burgess & Borgida, 1999)。

ジェンダー・ステレオタイプの特徴として指摘されるもう1つの点は、Williams & Best (1990) の言葉を借りると、「歴史的に見て、また多文化的に見て、男性は女性よりも作動的 (agentive) なものとして、女性は男性よりも共同的 (communal) なものとしてステレオタイプ化されてきた」という点である。作動性とは、一個人として目指すべきあり方に関するもので、例えば、自己主張や自己拡張、自己擁護、積極性といった性質がこの中に含まれる。その一方、共同性とは、個人が他者との相互依存関係において目指すべきあり方に関するもので、他者と一緒にいる感覚、見返りのない協力、接触、統合、思いやり、温かさといった

性質がこの中に含まれる (Bakan, 1966)。先述したFiske & Stevens (1993) の指摘にもあるが、親は、協調性や共感性、優しさ、親切さなどの共同性については娘に対して多く促す一方、独立性や積極性、強さ、自信などといった個人の主体性に関わる作動性については、息子に対して多く促す傾向があり、これは幼児期や学童期 (e.g., Eisenberg, Cumberland, & Spinrad, 1998; Fivush, Habermas, Waters, & Zaman, 2011)、青年期 (e.g., Ryan & Lynch, 1989)、成人期 (e.g., Brody, 1996; Geuzaine, Debry, & Liesens, 2000) のいずれにおいてもみられるといわれる。この点に対しては、子どもの持つ傾向に合わせ社会や親が反応をしている可能性があるとの指摘もあるが (Collins, Maccoby, Steinberg, Hetherington, & Bornstein, 2000)、いずれにせよ、男性は作動性を有するべきであり、女性は共同性を有するべきである、という価値観や期待がジェンダー・ステレオタイプとして我々を取り巻いていることは間違いないようである (e.g., Abele, 2003; Twenge, 1997)。

先述した通り、ジェンダー・ステレオタイプは規範的側面の強いステレオタイプであることが指摘されてきた。そこで長年想定されてきた規範とは、促進・推奨指向的 (prescriptive) な意味合いを持つ規範であった。すなわち、「〇〇であるべき」というような、対象集団の成員に相応しいとされる属性や行動、役割に言及する規範である。しかし、規範には、抑制・禁止指向的 (proscriptive) な意味合いをもつものも存在する。すなわち、「〇〇であるべきでない」という、対象集団の成員に相応しくないとされる属性や行動、役割に言及する規範である。規範に対するこのような捉え方は、近年、道徳判断の研究において、道徳的行動を促す“促進指向制御”と非道徳的行動を禁止する“抑制指向的制御”を区別したJanoff-Bulman & Carnes (2013) の道徳動機モデルなどでも見受けられる。

それでは、抑制指向的規範という視点を含めジェンダー・ステレオタイプを捉える場合、男女にとって抑制指向的規範が反映されたステレオタイプとは、どのようなものなのであろうか。「女性にとって促進指向的な規範を意味するステレオタイプに男性が当てはまる」、または「男性にとって促進指向的な規範を意味するステレオタイプに女性が当てはまる」というような、促進指向的規範の単純な“男女裏返し”によって、抑制指向的な規範を意味するジェンダー・ステレオタイプに言及しきることが可能なのであろうか。仮にそうであるとしたなら、男女それぞれの、促進指向的規範を意味するジェンダー・ステレオタイプを明らかにするだけで、ジェンダー・ステレオタイプの規範性を全て捉えることが可能である。実際に、この“裏返し”の枠組みで捉えることができる抑制指向的ジェンダー・ステレオタイプも存在する。例えば、女性は感情をあらわにすることが望ましいとされる一方で、男性は感情をあらわにしてはいけないとされる (e.g., O'Neill, 2008; Vandello & Bosson, 2013)。すなわち、「感情的である」ことは、女性にとっては促進指向的規範のステレオタイプであり、同時に男性にとっては禁止され、抑制指向的規範に含まれる。しかし、女性は「子ども好き」であるべき、というステレオタイプは存在しても、男性が「子ども好き」であってはいけない、

というステレオタイプは存在していない。また、男性は「精神的に不安定」ではいけないというステレオタイプは存在しているが、その逆に、女性は「精神的に不安定」であるべき、というステレオタイプは存在していない。このように、促進指向的規範を用いた“男女裏返し”の枠組みだけで、抑制指向的なジェンダー規範を捉えることには限界がある。

こうした点を踏まえ、男女それぞれに独立した形で、促進指向的規範のステレオタイプと抑制指向的規範のステレオタイプが存在することを想定し、ジェンダー・ステレオタイプの規範性を捉える試みもなされている。

Prentice & Carranza (2002) は、文化内で（性別を考慮せずに）“一個人”にとって、望ましいとされる特性と望ましくないとされる特性が存在することを前提とした上で、ジェンダー・ステレオタイプに反映された促進指向的規範と抑制指向的規範を、以下のように概念的に定義した。まず“一個人”にとって望ましいとされる特性のうち、対象の性別に対してはさらに強く望まれる特性が、その性別にとっての“強調された”促進指向的規範特性として定義された。同様にして、“一個人”にとって望ましいとされる特性のうち、対象の性別に対して望まれる程度はそれほど強くない特性は、その性別にとっての“許容された”促進指向的規範特性と定義された。そして、“一個人”にとって望ましくないとされる特性に対しても同様にして、対象の性別にとって“強調された”抑制指向的規範特性と、“許容された”抑制指向的規範特性が定義された。すなわち、ジェンダー規範特性が、男女各々4つずつ、計8つに類型化された。本研究においては、このPrentice & Carranzaの考えに理論的基盤を置き、“強調された”規範特性のことを促進指向的および抑制指向的ジェンダー規範特性と捉える。すなわち、概念上は、促進指向的ジェンダー規範特性を、一般にポジティブな特性とされるが、対象の性別にとってはさらにポジティブさが強調される特性と考え、抑制指向的ジェンダー規範特性を、一般にネガティブな特性とされるが、対象の性別にとってはさらにネガティブさが強調される特性と考える。しかし、このPrentice & Carranzaの枠組みには限界も存在する。それは、“一個人”と男性または女性との間で規範性を比較しているため、各特性の男性に対する規範性と女性に対する規範性との差が明確でない、という問題である。

これに対し、Rudman, Moss-Racusin, Phelan, & Nauts (2012) では、対象の性別によって望ましいとみなされる特性のうち、もう片方の性別と比べてその“望ましさ”の程度が顕著に強いものを、その性別にとって促進指向的規範特性と定義し、逆に、対象の性別によって望ましくないとみなされる特性のうち、もう片方の性別よりも、その“望ましくなさ”の程度が顕著に強いものを、その性別にとって抑制指向的規範特性と定義した。そして男女各々に2つずつ、計4つにジェンダー規範特性を類型化している。また、Rudmanらは、この4つの規範特性のうち、促進指向的男性ジェンダー規範特性が作動性（e.g.,「積極的である」,「自己主張できる」）を、抑制指向的男性ジェンダー規範特性は脆弱性（e.g.,「気が弱い」「不安定である」）をそれぞれ反映し、一方で、促進的女性ジェンダー規範特性は共同性（e.g.,「やさ

しい」「協力的である」)を、抑制的女性ジェンダー規範特性は支配性(e.g.,「支配的である」「傲慢である」)を反映していることも示している。

Rudmanらによるこの研究結果は、大きく分けて3つの重要な意味を持つと考えられる。第1に、Rudmanらは先述したPrentice & Carranzaの手法と異なり、両性の差や両性の対比に焦点を置いてジェンダー規範性を捉える有用な手法を提示した、という点である。この理由から、本研究においてもこのRudmanらの測定法の利点を活用して、促進指向的ジェンダー規範特性を、対象の性別にとって望ましく、かつ、もう片方の性別に比べるとその“望ましさ”の程度が顕著に強い特性とし、抑制指向的ジェンダー規範特性は、対象の性別にとって望ましくなく、かつ、もう片方の性別と比べその“望ましくなさ”の程度が顕著に強い特性とする。第2点目は、Rudmanらによって、促進指向的ジェンダー規範特性がそれぞれ、男性では作動性を、女性では共同性を反映していることが示され、それまでに主張されてきたジェンダー・ステレオタイプの(促進指向的意味合いに限った)規範的側面に関する知見が再現された、という点である。第3点目は、規範を4類型化して捉えたことによって、抑制指向的ジェンダー規範特性のあり方が単純ではなく、そして男女で異なっている可能性を示した、という点である。

Rudmanらの研究では、促進指向的ジェンダー規範に関して確かに、男性がより作動的であるべき、女性がより共同的であるべきとみなされていた。一方、抑制指向的ジェンダー規範に関しては、女性に対してより強く禁止されている特性が支配性であったが、これは「男性が持つべき特性を女性が持つべきでない」という、促進指向的ジェンダー規範の“裏返し”パターンに類似したものともみなせる。つまり、支配性(e.g.,「傲慢である」)とは、作動性(e.g.,「自己主張できる」)をネガティブな意味合いに変換した特性、あるいは過剰な作動性、と捉えることができるため、この抑制指向的女性ジェンダー規範特性は、男性が持つべき特性を女性が“持ちすぎる”こと、すなわち女性が“作動的すぎる”ことを禁じている、と考えることができる。一方、抑制指向的男性ジェンダー規範特性は脆弱性(e.g.,「依存的である」)を反映しており、これは、共同性(e.g.,「やさしい」)がネガティブに意味変換された特性、あるいは過剰な共同性として捉えるのではなく、作動性(e.g.,「独立心が強い」)の欠如を意味する特性として捉えることができる。つまり、女性が持つべき特性を男性が“持ちすぎる”こと、すなわち、男性が“共同的すぎる”ことを禁じているのではなく、むしろ男性が“持つべき特性を持っていない”ことを禁じている、と考える方が適切である。ただし、抑制指向的男性ジェンダー規範特性に関するこの結果に対しては、Rudmanらがそもそもネガティブ特性の中に“過剰な共同性”を想定していなかった、という問題を指摘することができる。そのため、抑制指向的男性ジェンダー規範特性が、本当に脆弱性あるいは“作動性の欠如”だけにより反映されるのかどうかについては、検証不足であるといえる。

目的

上述した通り、アメリカでの研究においては男女に対するジェンダー規範特性を、促進指向的なものと抑制指向的なものに切り分けて捉える試みがなされている。その一方で、日本において男女のジェンダー規範に含まれる特性を特定した先行研究に目を向けてみると、MHFスケール（伊藤, 1978）や日本語版BSRI（東, 1990, 1991）など、促進指向的規範、すなわち「どうあるべきか」という観点から調べた研究は見受けられるものの、抑制指向的規範の観点から男女のあり方を調べた研究は行われてきていない。そこで、本研究では日本におけるジェンダー・ステレオタイプの規範的側面を、男女それぞれに対し促進指向的規範と抑制指向的規範を独立に想定し4類型によって捉え、それらがどのような特性により反映されているかを検証することを目的とする。

なお、本研究においてジェンダー規範を検証するにあたっては、以下に挙げる2点に焦点を当てる。第1に、Williams & Best (1990) の指摘にあるように、ジェンダー・ステレオタイプは多文化的に共有され、ある程度一貫している、という知見に則り、アメリカの先行研究（Rudman et al., 2012）と同様に、日本においても、促進指向的男性ジェンダー規範は作動性を、促進指向的女性ジェンダー規範は共同性を、抑制指向的男性ジェンダー規範は脆弱性を、抑制指向的女性ジェンダー規範は支配性を、各々反映する特性によって構成されるのかどうかに着目する。第2に、促進指向的ジェンダー規範特性がそれぞれ作動性と共同性を反映することを想定した上で、抑制指向的ジェンダー規範特性の中のネガティブな意味合いについて、作動性または共同性の“過多”と“欠如”という2側面の両方を考慮して検証する。

方法

調査対象者

株式会社マクロミルの全国の登録モニタから、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県のいずれかの在住者として選出された382名（男性195名、女性187名、平均年齢44.44歳、 $SD = 10.77$ 、年齢幅25—64歳）が調査に回答した。なお、回答者は性別、年齢比、居住地域を国勢調査の人口動態に合わせて選出された。

本調査実施時期

2016年2月初旬

素材

本調査で用いる性格特性語の選定においては、男性性・女性性を2つの独立した次元として捉えるアンドロジニー・スケールを基本として用いることとし、まず、このスケールに基づく測定として国内において代表的な研究から項目を選定した。具体的には、Bem (1974) が開発したBem Sex Role Inventory (BSRI) の日本版の項目（東, 1990, 1991）とMHFスケール

ル（伊藤, 1978）、性役割特性尺度（伊藤, 1986）に加え、土肥（1988）、柏木（1974）の研究で用いられた項目を中心に採用し選定を行った。また先行研究から作動性と共同性がジェンダー・ステレオタイプの規範性を捉える上で鍵となっていることが示されているため、共同性・作動性尺度（土肥・廣川, 2004）も項目選定の参考とした。また予備調査として東洋大学生271名を対象に男性性・女性性を表すと考えられる性格特性語を、自由記述によって収集した。予備調査で収集された特性語の中からは主に、作動性欠如、作動性過多、共同性欠如、共同性過多を反映するネガティブな特性語が、それぞれ抽出された。そこから意味合いの重複したものを除外していき、最終的にポジティブな男性性としては19項目、ポジティブな女性性を19項目、ネガティブな特性語として作動性欠如、作動性過多、共同性欠如、共同性過多を反映する特性を含めた32項目、計70項目が選定された。

Table 1 調査に用いたジェンダー関連特性語リスト（70項目）

ポジティブ特性		ネガティブ特性	
男性性	女性性	男性性	女性性
1. ビジネスセンスがある	20. 明るい	(支配性 や 作動性過多など)	(過干渉 や 共同性過多など)
2. 積極的である	21. 愛想がよい	39. ごう慢である	47. 言動が大げさである
3. 忍耐強い	22. 親しみやすい	40. 見栄っぱりである	48. おせっかいである
4. 毅然とした態度をとれる	23. 従順である	41. 自己中心的である	49. おしやべりである
5. 自分の判断や能力を信じている	24. 困っている人への思いやりがある	42. 強引である	50. 噂好きである
6. 自己主張できる	25. 見た目に気をつかっている	43. 自分の思い通りにしないと気がすまない	51. 他人のことを詮索したがる
7. リーダーとしての能力を備えている	26. 子ども好きである	44. 自慢するのが好きである	52. 嫉妬深い
8. 知的である	27. 聞き上手である	45. 我が強い	53. 人付き合いに対し打算的である
9. 頼りになる	28. 感情を人前で表現する	46. 上から目線である	54. 感情に動かされやすい
10. プレッシャーに強い	29. 情愛細やかである	(冷淡さ や 共同性欠如など)	(脆弱性 や 作動性欠如など)
11. 自尊心が高い	30. 人の気持ちを汲んで理解する	55. サバサバしている	63. 優柔不断である
12. 効率的に行動する	31. 謙虚である	56. 怒りっぽい	64. 気弱である
13. 競争心が強い	32. 繊細である	57. 人への好き嫌いが激しい	65. 騙されやすい
14. 行動力がある	33. きれいな好きである	58. 皮肉っぽい	66. 臆病である
15. チャレンジ精神が豊かである	34. 親切である	59. 反抗的である	67. 気持ちの浮き沈みが激しい
16. 大望をもっている	35. やさしい	60. 冷たい	68. 恥ずかしがり屋である
17. 危険をおかすことをいとわない	36. 話し方がやさしく穏やかである	61. 人のせいにばかりする	69. 世間知らずである
18. 責任感が強い	37. 礼儀正しい	62. 協調性がない	70. 人の顔を気にする
19. 教養がある	38. 気づかいが上手である		

調査票

調査はWeb調査（株式会社マクロミルに委託）により実施された。

上述の特性語70項目に対し、2種類の調査を用意し、回答者にそのいずれかが割り当てられた。2種類の調査は、日本において、

① 成人男性が持つことが望ましいとされる程度、

② 成人女性が持つことが望ましいとされる程度、

を尋ねるものであり（ともに「1.全く望ましくない」～「9.非常に望ましい」の9件法にて回答）、参加者には70の特性語が完全にランダムな順で呈示された。また、調査の設問部分には、回答者が個人的に考える望ましさではなく、日本の社会においてどの程度望ましいと思われるか、を回答するよう注意が記載されていた。

結果

促進指向的/抑制指向的ジェンダー規範特性を規定する基準

先述したとおり、本研究では、促進指向的ジェンダー規範特性、抑制指向的ジェンダー規範特性の操作的定義として、Rudmanら（2012）の定義に従う。すなわち、促進指向的ジェンダー規範特性は、対象の性にとって望ましく、かつ、もう片方の性に比べその“望ましき”が顕著であるものとし、抑制指向的ジェンダー規範特性は、対象の性にとって望ましくなく、かつ、もう片方の性と比べその“望ましくなさ”が顕著であるものとした。

そこで、本研究においては、ある対象の特性に対してそのジェンダー規範性を判断するにあたり、その特性が男性にとって望ましいとみなされた程度と、女性にとって望ましいとみなされた程度を比較する。そしてその程度の差に対して効果量（Cohen's d -score）を算出し、その値が一定基準を上回ったものを男性/女性のいずれかにとって促進指向的/抑制指向的なジェンダー規範特性であるとみなした。なお、本稿中においては表記上に限り便宜的に、促進指向的ジェンダー規範特性の場合は、対象の特性において、男性への促進指向性が強いほど効果量 d の値が正方向に大きな値を示し、逆に女性への促進指向性が強いほど d の値は負方向に大きな値を示すように、効果量 d を表現するものとする。すなわち、対象の特性を男性がもつことに対する望ましさが女性のそれに比べ高くなるほど、効果量 d が正の値を大きく示し、逆に d が負の値を大きく示すほど、女性にとっての望ましさが男性にとっての望ましさをより上回っていることを反映するように表記する。同様に、抑制指向的ジェンダー規範特性の場合にも男性への抑制指向性が強いほど効果量 d の値が正方向に大きな値を示し、逆に女性への抑制指向性が強いほど d の値は負方向に大きな値を示すように、効果量 d を表現する。なお、Cohen's d -scoreに関しては一般に、 $0 \leq d < 0.20$ では効果はほぼなし、 $0.20 \leq d < 0.50$ であればごく少量の効果あり、 $0.50 \leq d < 0.80$ であれば中程度の効果あり、 $0.80 \leq d$ であれば大きな効果あり、と判断をするが（Cohen, 1988）、本研究では、Rudmanら（2012）の基準を踏襲し、 $0.40 \leq d$ であれば、“少ないとはいえない差”が、その対象の特性に対する男性への望ましさと女性への望ましさの判断の間に存在しているものとみなし、その特性を、片方の性別にとっての規範特性と規定する。

以上を踏まえ、70個すべての特性語に対して、男性にとっての望ましさと女性にとっての望ましさを比較し、促進指向的ジェンダー規範特性、抑制指向的ジェンダー規範特性に該当する特性語を選定した。

促進指向的男性ジェンダー規範特性

「男性にとっての望ましき」において平均得点が9点中6点以上で、かつ、「女性にとっての望ましき」における平均得点との効果量 $d \geq 0.40$ であった特性を促進指向的男性ジェンダー規範とした。Table 2の上方に示された11個の特性がこれにあたる（ $0.45 \leq d \leq 0.71$ 、

$M_d = 0.54$)。促進指向的男性ジェンダー規範は「積極的である」「行動力がある」「リーダーとしての能力を備えている」など、概ね、作動性を示す特性語によって構成された。

促進指向的女性ジェンダー規範特性

「女性にとっての望ましさ」において平均得点が9点中6点以上で、かつ、「男性にとっての望ましさ」における平均得点との効果量 $d \leq -0.40$ であった特性を促進指向的男性ジェンダー規範とした。Table 2の下方に示された7個の特性がこれにあたる ($-0.71 \leq d \leq -0.40$, $M_d = -0.57$)。促進指向的女性ジェンダー規範は、「従順である」「愛想がいい」「見た目に気をつかう」など、概ね、従順さと美を反映する特性語によって構成された。

Table 2 男女それぞれに対する促進指向的ジェンダー規範特性

特性	促進指向性	男性 (<i>n</i> = 191)	女性 (<i>n</i> = 191)
	<i>d</i>	<i>M</i>	<i>M</i>
促進指向的男性ジェンダー規範特性			
【作動性】			
リーダーとしての能力を備えている	0.71 ***	7.07	6.00
ビジネスセンスがある	0.62 ***	7.09	6.16
積極的である	0.59 ***	6.91	6.07
行動力がある	0.57 ***	7.06	6.21
チャレンジ精神が豊か	0.56 ***	6.96	6.12
責任感が強い	0.52 ***	7.30	6.52
プレッシャーに強い	0.51 ***	6.87	6.11
頼りになる	0.51 ***	7.18	6.44
毅然とした態度をとれる	0.47 ***	6.81	6.09
自己主張できる	0.47 ***	6.55	5.87
忍耐強い	0.45 ***	6.91	6.25
	(<i>Md</i> = 0.54)		
促進指向的女性ジェンダー規範特性			
【従順と美】			
従順である	- 0.71 ***	5.10	6.13
繊細である	- 0.64 ***	5.23	6.19
愛想がいい	- 0.62 ***	5.90	6.80
きれい好きである	- 0.59 ***	6.21	7.05
見た目に気をつけている	- 0.56 ***	5.85	6.68
気づかいが上手である	- 0.46 ***	6.49	7.19
話し方がやさしく穏やかである	- 0.40 ***	6.44	7.04
	(<i>Md</i> = - 0.57)		

注) 促進指向性の d 値は、正の値である場合は値が大きいほど女性よりも男性にとって望ましいとされる程度が強く、負の値である場合は値が小さいほど男性よりも女性にとって望ましいとされる程度が強いことを表す。効果量 d の目安は小 = 0.20, 中 = 0.50, 大 = 0.80である (Cohen, 1988)。

*** : $p < .001$

抑制指向的男性ジェンダー規範特性

「男性にとっての望ましさ」において平均得点が9点中4点以下で、かつ「女性にとっての望ましさ」における平均得点との効果量 $d \geq 0.40$ であった特性を抑制指向的男性ジェンダー規範特性とした。Table 3上方に示された9語がこれにあたり、「臆病である」「気弱である」など6語が脆弱性あるいは作動性欠如を反映し ($0.45 \leq d \leq 0.70$, $M_d = 0.57$)、残り3語は「お

しゃべりである」「噂好きである」「おせっかいである」という、過干渉（共同性過多）を反映する特性語（ $0.46 \leq d \leq 0.54$ 、 $M_d = 0.50$ ）で構成された。

抑制指向的女性ジェンダー規範特性

「女性にとっての望ましさ」において平均得点が9点中4点以下で、かつ「男性にとっての望ましさ」における平均得点との効果量 $d \geq -0.40$ であった特性を抑制的女性ジェンダー規範とした。Table 3下方に示された7語がこれにあたる（ $-0.68 \leq d \leq -0.40$ 、 $M_d = -0.46$ ）。「強引である」「我が強い」「上から目線である」など、概ね支配性あるいは作動性過多を反映する特性語から構成された。

Table 3 男女それぞれに対する抑制指向的ジェンダー規範特性

特性	抑制指向性	男性 (<i>n</i> = 191)	女性 (<i>n</i> = 191)
	<i>d</i>	<i>M</i>	<i>M</i>
抑制指向的男性ジェンダー規範特性			
【脆弱性（作動性欠如）】			
気弱である	0.70 ***	3.26	4.19
恥ずかしがり屋である	0.61 ***	3.92	4.64
世間知らずである	0.55 ***	2.93	3.78
優柔不断である	0.55 ***	3.06	3.81
臆病である	0.54 ***	3.48	4.22
人の顔色を気にする	0.45 ***	3.76	4.43
	(<i>Md</i> = 0.57)		
【過干渉（共同性過多）】			
おしゃべりである	0.54 ***	3.94	4.80
噂好きである	0.49 ***	3.38	4.16
おせっかいである	0.46 ***	3.98	4.72
	(<i>Md</i> = 0.50)		
抑制指向的女性ジェンダー規範特性			
【支配性（作動性過多）】			
強引である	-0.68 ***	4.60	3.59
冷たい	-0.47 ***	3.47	2.75
皮肉っぽい	-0.44 ***	3.57	2.89
我が強い	-0.42 ***	4.38	3.71
上から目線である	-0.40 ***	3.26	2.63
見栄っぱりである	-0.40 ***	4.07	3.46
傲慢である	-0.40 ***	3.44	2.80
	(<i>Md</i> = -0.46)		

注) 抑制指向性の *d* 値は、正の値である場合は値が大きいほど女性よりも男性にとって望ましくないとされる程度が強く、負の値である場合は値が小さいほど男性よりも女性にとって望ましくないとされる程度が強いことを表す。効果量 *d* の目安は小 = 0.20, 中 = 0.50, 大 = 0.80 である (Cohen, 1988)。

*** : *p* < .001.

考察

本研究の目的は、日本におけるジェンダー・ステレオタイプの規範的側面を、男女それぞれに対し、促進指向的規範と抑制指向的規範を独立に想定して、4類型によって捉え、それらがどのような特性により反映されているのかを検証することであった。特に、アメリカの先行知見との類似性や相違性を検証することが重要な焦点の1つである。

分析の結果、日本における促進指向的男性ジェンダー規範特性は作動性を反映していた。これは、アメリカの先行知見と一致し、男性に対して特に強く期待される特性がアメリカでも日本でも同様に、作動性であることが示された。一方、促進指向的女性ジェンダー規範特性の結果をみると、アメリカでは共同性が反映されているのに対し、日本においては共同性というよりもむしろ従順さと美が反映されていた。また、抑制指向的ジェンダー規範特性について目を向けてみると、抑制指向的女性ジェンダー規範特性は支配性を反映しており、これはアメリカにおける知見と一致していた。最後に、抑制指向的男性ジェンダー規範特性は、日本では脆弱性と過干渉を反映していた。脆弱性に関してはアメリカの知見と一致しているが、過干渉、すなわち過剰な共同性もまた日本においては男性に特に禁じられていることが示された。これらの結果を受け、以下の2点について考察を深めたい。

第1点目として、促進指向的女性ジェンダー規範特性は、なぜ日本では共同性ではなく従順さと美によって反映されていたのであろうか。アメリカの先行知見に従えば、「親切である」や「やさしい」、「温かい」、「謙虚である」、「思いやりがある」といった共同性を代表する特性が男性に比べ女性に対して顕著に望まれている (Rudman et al., 2012)。それに対し本研究の結果では、それらの特性は確かに、日本でも女性に強く望まれているが、男性に対しても同様に、極めて強く望まれており、男女それぞれに対する望ましさの程度にほとんど差が生じず、結果として日本では、共同性を代表する特性が促進指向的女性ジェンダー規範特性には含まれなかった。このことは、相互独立的自己観と相互協調的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) に代表されるような、東洋と西洋の文化差から生じている可能性が考えられる。相互協調的自己観が強いと言われる日本文化では、共同性を備え、他者と上手に関係性を築いていくことが男女問わず重視されると考えられる。一方で、日本においては、「気づかいができる」「愛想がいい」「従順である」などが促進指向的女性ジェンダー規範に含まれている。これらは共同性を反映する代表的な特性とは言えないが、共同性と全く無関係であるとも言いきれない。男性にとっても共同性が高く望まれる日本にあってなお、女性が男性との間で望ましさにおいて比較的大きな差をつけた、促進指向的女性ジェンダー規範特性は、共同性ではなく、伊藤 (1986) の指摘する「美と繊細さ」を反映しているものと捉える方が適切かもしれない。伊藤は、女性性として扱われる内容には、共同性と、美・繊細さの2つの次元が含まれており、伝統的な狭義の女性性である美・繊細さは男性性である作動性と独立な関係にあると指摘する。さらに、作動性と共同性は両者にとっての望ましさという点で互いに関連性を有し、そのため、共同性は、伝統的な男性性と女性性をつなぐ共通項、媒介項であり、Humanity (伊藤, 1978) により近いものであると考えられている。すなわち、日本においては、男性であっても共同性を有することが女性と同等に望ましいこととみなされ、従順さや美の追求こそ、男性に比べて女性に特に望ましいとみなされる要素であることを示す本研究結果は、この考えを支持しているものといえるであろう。また、東洋文化には性別

役割分業や家父長制の影響力が強く残っている傾向にあることを考えると、こうした特性を、異性愛関係、すなわち夫婦関係や恋愛関係の中で女性に期待されているという側面から捉えることも重要であるかも知れない。

第2点目として、日本における抑制指向的男性ジェンダー規範特性に、脆弱性だけではなく、過干渉を反映する特性が含まれたことについて考えたい。Rudmanら（2012）の研究によれば、アメリカにおいては男性に特に禁止されている特性は、脆弱性を反映している。本研究結果から、日本においても脆弱性を反映した特性が抑制指向的男性ジェンダー規範特性の大多数を占めており、男性に対して、弱く不安定な姿を見せることを強く禁ずる規範が存在することは、文化を超え日米どちらの社会においても一貫して観察される傾向であると考えられる。ただし、Rudmanらはこれらの特性に対して単純に、脆弱性というラベル付けをしたが、実際には、“作動性の欠如”、すなわち、男性にとっての促進指向的規範特性の“裏返し”としてそれらの特性を捉えるべきか、脆弱性として作動性とは独立したラベルを付して捉えるべきか、その判断は容易ではない。本研究では、抑制指向的規範特性を捉える際に、脆弱性や支配性のように、作動性や共同性と完全に独立したラベル付けを想定するだけでなく、作動性欠如、作動性過多、共同性欠如、共同性過多という4つの枠組みを事前に想定していた。その結果、アメリカの先行知見では浮かび上がらなかった“共同性の過多”、すなわち過干渉が、抑制指向的男性ジェンダー規範特性に反映されていることが見出されたと考えられる。ただし、先ほど第1点目の議論の中で言及したように、日本では女性と同等に男性にも共同性が望まれていることを踏まえると、この点は一見矛盾しているように感じられるかも知れない。なぜならば、男性も女性も同じように、共同性を有することを規範として求められているにも関わらず、その共同的な姿勢が度を越えていると判断され得る場合に限り、ダブル・スタンダードが適用されることになるからである。促進指向的男性ジェンダー規範特性 — 作動性」、「抑制指向的女性ジェンダー規範特性 — 支配性（作動性過多）」というこの両者の関係性は、仮に作動性という1つだけのモノサシ上に男女を配置したとしても矛盾することはない。しかし、共同性という1つのモノサシ上ではこれと同様にはいかないのである。なぜこのようなことが生じるのか、その理由を明確に述べることは現段階ではできない。1つの可能性を挙げるならば、ある一定のレベル内に収まる共同性は、確かに集団主義社会の在り方を円滑にし、安定させる上で効果的であると考えられるため、日本では性別によらず強く求められるが、共同性の度合いが一定レベルを超えてしまった特性の場合には、日本人はそれらと集団主義社会を関連づける意識を持ち合わせておらず、女性は男性よりも共同的であるというジェンダー・ステレオタイプの影響のみが強く反映されたのではないだろうか。いずれにせよ、この結果に対する解釈は、今後の課題の1つとして残されている。

本研究の問題点

本研究にはいくつか問題点も挙げられる。第1に、各規範特性を規定する際の効果量 d (Cohen's d -score) の基準に関する問題である。本研究では、対象の性にとって 望ましく / 望ましくなく、かつ、もう片方の性に比べその“望ましさ / 望ましくなさ”が顕著であることを、対象の性にとっての 促進指向的 / 抑制指向的規範特性 として定義した。そして、その“顕著”であるか否かの判断基準として、効果量を用い、効果量 $d \geq 0.40$ であることをもって、“顕著”な差とみなした。しかし、この基準が本当に適切であるかどうかは疑問が残る。少なくとも、通例としての効果量 d の目安は、 $0.20 \leq d < 0.50$ では「少量の効果あり」、 $0.50 \leq d < 0.80$ で「中程度の効果あり」とされている (Cohen, 1988)。この点を踏まえれば、本研究においても、少なくとも効果量 $d \geq 0.50$ であることををもって“顕著”な差とみなすことがより望ましかったと考えられる。しかし、実際には、各ジェンダー規範特性の項目を一定数以上確保すること、そして先行研究と基準を統一することを優先し、効果量 $d \geq 0.40$ を各規範特性の基準とせざるを得ず、結果的に中途半端な基準となってしまう。第2に、オンライン調査を用いる上での調査票デザインに関する問題である。本研究はオンライン調査を用い、70項目に対して、先行研究と同様に9件法での回答を調査対象者に求めた。しかし、オンライン調査画面上で9件法を用いる場合、調査画面が見えにくくなり、回答者へ余計な心理的負担がかかった可能性が考えられる。第3に、調査のために選定された特性語に関する問題である。本研究では、複数の先行研究からジェンダー関連の特性語を選定したほか、大学生を対象に予備調査を行い、その内容も反映させている。しかし、本調査では大学生ではなく一般社会人のみを対象としており、大学生を対象とした予備調査が適切であったかどうかは議論の余地がある。最後に、本研究の分析では参加者の性別や年齢による差異は考慮されていない。性別や年齢、あるいは性役割に対する態度などの個人差変数により各ジェンダー規範が異なる可能性についても検討することが望ましいであろう。

今後の展望

本研究では、日本におけるジェンダー・ステレオタイプの規範的側面を、促進指向的規範と抑制指向的規範の両方から捉えた。ジェンダー・ステレオタイプは男性を作動性と、女性を共同性と、それぞれ結びつけていることが指摘されてきたが、近年、ステレオタイプ研究の中では、この「作動性—共同性」、あるいは「能力—人柄」の次元によって様々な集団ステレオタイプが特徴づけられ、同時に、その両次元において負の相関を示す組み合わせにより両面価値的 (ambivalent) な評価を与える相補的 (complementary) な内容 (e.g., 「彼は有能だが冷たい」「彼女は温かいが無能である」) のステレオタイプが形成されやすいことが指摘されている (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002)。さらにこうした相補的世界観に依存することで人々は、ある次元での格差に対し疑念を感じなくなり、さらにある次元での格差は

別の次元で解消されるはずであるという推論を促されることによって、現存する社会システムを正当化し、維持するものとも考えられている。ジェンダー・ステレオタイプはこの作動性・共同性をかなり色濃く反映し、他のステレオタイプよりも規範的側面が強いため、社会システム正当化機能もより強く働くはずである。ステレオタイプに限らず、両面価値的性差別主義（Glick & Fiske, 1996）のような男女の在り方（e.g., 家父長制）に対する信念においても同様の傾向は見受けられている。日本において、男性と女性がどうあるべきかに加え、どうあるべきではないかをも捉えた本研究の知見は、ジェンダーに関連した社会システム正当化に対してより詳細な実証研究を可能にするであろう。実際、Rudmanら（2012）は、男女それぞれに対する促進指向的ジェンダー規範特性と抑制指向的ジェンダー規範特性が、社会的な地位の高さとどのように関連しているか示している。そして、ジェンダー・ステレオタイプに反する女性（i.e., 作動的な女性リーダー）に差別や偏見が生じるバックラッシュ効果（Rudman, 1998）の背景には、現存するジェンダー・ヒエラルキーの維持という、一種の社会システム正当化動機が存在することを示唆している。本研究の結果からは、促進指向的女性ジェンダー規範特性が作動性よりもむしろ従順と美を反映し、日本では結婚相手や恋愛対象のような、対人レベルの男女関係の影響がジェンダー規範特性に現れている可能性が示唆された。このことから、日本ではジェンダー規範形成において、ジェンダー・ヒエラルキーという社会規模の男女の関係性よりも、家庭内の男女の関係性や異性愛関係から与えられる影響の方が強い可能性が示唆される。従って、日本では社会的地位関係ではなく結婚制度や家父長制という社会システムの正当化に対し、本研究で見出された4つのジェンダー規範が、どのように関連し働きかけているのか、その点をジェンダー・ステレオタイプの逸脱者に対するバックラッシュ効果と関連付けて検証することで、幅広い分野に対して新たな知見を与え貢献することができものと考えられる。

引用文献

- Abele, A. E. (2003). The dynamics of masculine-agentive and feminine-communal traits: Findings from a prospective study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 768–776.
- 東 清和 (1990). 心理的両性具有1——BSRIによる心理的両性具有の測定—— 早稲田大学教育学部学術研究（教育・社会教育・教育心理・体育編）, *39*, 25–26.
- 東 清和 (1991). 心理的両性具有2——BSRI日本語版の検討—— 早稲田大学教育学部学術研究（教育・社会教育・教育心理・体育編）, *40*, 61–71.
- Bakan, D. (1966). *The duality of human existence: An essay on psychology and religion*. Chicago, IL: Rand McNally.
- Bem, S. L. (1974). The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155–162.

- Brody, L. R. (1999). *Gender, emotion, and the family*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Burgess, D., & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law*, **5**, 665–692.
- Cherry, F., & Deaux, K. (1978). Fear of success versus fear of gender-inappropriate behavior. *Sex Roles*, **4**, 97–101.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Collins, W. A., Maccoby, E. E., Steinberg, L., Hetherington, E. M., & Bornstein, M. H. (2000). Contemporary research on parenting: The case for nature and nurture. *American Psychologist*, **55**, 218–232.
- Conley, T.D., Ziegler, A., & Moors, A.C. (2013). Backlash from the bedroom: Stigma mediates gender differences in acceptance of casual sex offers. *Psychology of Women Quarterly*, **37**(3), 392–407.
- Devine, P. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5–18.
- 土肥 伊都子 (1988). 男女両性具有に関する研究——アンドロジニー・スケールと性別化得点——
関西学院大学社会学部紀要, **57**, 89–97.
- 土肥 伊都子・廣川 空美 (2004). 共同性—作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討——
ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定—— 心理学研究, **75**, 420–427.
- Eisenberg, N., Cumberland, A., & Spinrad, T. L. (1998). Parental socialization of emotion. *Psychological Inquiry*, **9**, 241–273.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competent and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878–902.
- Fiske, S., & Stevens, L.E. (1993). What's so special about sex? Gender stereotyping and discrimination. In S. Oskamp & M. Costanzo (Eds.), *Gender issues in contemporary society* (pp.173–196). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Fivush, R., Habermas, T., Waters, T., & Widaad, A. (2011). The making of autobiographical memory: Intersections of culture, narratives and identity. *International Journal of Psychology*, **46** (5), 321–345.
- Geuzaine, C., Debry, M., & Liesens, V. (2000). Separation from parents in late adolescence: The same for boys and girls? *Journal of Youth and Adolescence*, **29**, 79–91.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and

- benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491–512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 33 (pp.115–188). San Diego, CA: Academic Press.
- Heilman, M. E., & Wallen, A. S. (2010). Wimpy and undeserving of respect: Penalties for men's gender-inconsistent success. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**, 664–667.
- 伊藤 裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, *26*, 1–11.
- 伊藤 裕子 (1986). 性役割特性語の意味構造——性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み—— 教育心理学研究, *34*, 168–174.
- Janoff-Bulman, R., & Carnes, N. C. (2013). Surveying the moral landscape: Moral motives and group-based moralities. *Personality and Social Psychology Review*, **17**, 219–236.
- 柏木 恵子 (1974). 青年期における性役割認知III 教育心理学研究, *22* (4), 205–215.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224–253.
- Moss-Racusin, C., Phelan, J., & Rudman, L. A. (2010). When men break the gender rules: Status incongruity and backlash against modest men. *Psychology of Men & Masculinity*, **11** (2), 140–151.
- O'Neil, J. M. (2008). Summarizing twenty-five years of research on men's gender role conflict using the Gender Role Conflict Scale: New research paradigms and clinical implications. *Counseling Psychologist*, **36**, 358–445.
- Phelan, J. E., & Rudman, L. A. (2010). Prejudice toward female leaders: Backlash effects and women's impression management dilemma. *Social and Personality Psychology Compass*, **4** (10), 807–820.
- Prentice, D. A., & Carranza, E. (2002). What women and men should be, shouldn't be, are allowed to be, and don't have to be: The contents of prescriptive gender stereotypes. *Psychology of Women Quarterly*, **26**, 269–281.
- Rudman, L. A. (1998). Self-promotion as a risk factor for women: The costs and benefits of counterstereotypical impression management. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 629–645.
- Rudman, L.A., & Fairchild, K. (2004). Reactions to counterstereotypic behavior: The role of backlash in cultural stereotype maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 157–176.
- Rudman, L. A., & Glick, P. (1999). Feminized management and backlash toward agentic women: The hidden costs to women of a kinder, gentler image of middle managers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 1004–1010.

- Rudman, L. A., Moss-Racusin, C. A., Phelan, J. E., & Nauts, S. (2012). Status incongruity and backlash effects: Defending the gender hierarchy motivates prejudice against female leaders. *Journal of Experimental Social Psychology*, **48**, 165–179.
- Ryan, R. M., & Lynch, J. H. (1989). Emotional autonomy vs. detachment: Revisiting the vicissitudes of adolescence and young adulthood. *Child Development*, **60**, 340–356.
- Twenge, J. M. (1997). Changes in masculine and feminine traits over time: A meta-analysis. *Sex Roles*, **36**, 305–325.
- Vandello, J. A., & Bosson, J. K. (2013). Hard won and easily lost: A review and synthesis of theory and research on precarious manhood. *Psychology of Men & Masculinity*, **14**, 101–113.
- Williams, J. E., & Best, D. L. (1990). *Measuring sex stereotypes: A multination study* (revised ed.). Newbury Park, CA: Sage.
- Williams, M. J., Tiedens, L. Z. (2016). The subtle suspension of backlash: A meta-analysis of penalties for women's implicit and explicit dominance behavior. *Psychological Bulletin*, **142** (2), 165–197.
- Yoder, J. D., & Schleicher, T. L. (1996). Undergraduates regard deviation from occupational gender stereotypes as costly for women. *Sex Roles*, **34**, 171–188.

Prescriptive and Proscriptive Gender Stereotypes in Japan

KURAYA, Takumi

Abstract

Gender stereotypes are highly prescriptive. More precisely, they are comprised of four sets of rules: prescriptive rules dictating how men and women should behave and proscriptive rules delineating how women and men should not behave. In the present research, an online survey was conducted among 382 adults aged 25 to 64 in order to clarify what characteristics constitute each of four gender rules in Japan. The results showed that male prescriptions reflected agency in general, but male proscriptions were constituted by those reflecting weakness and meddlesomeness. On the other hand, female proscriptions reflected dominance and female prescriptions reflected submissiveness and beauty. Finally, the differences between American and Japanese gender rules are considered and implications for system justification for patriarchy and marriage are discussed.

Keywords : Gender, Stereotypes, Prescriptive/Proscriptive rules, Masculinity, Femininity